

Matta レビュー

”ラムンショー・ マッタは、ひとつの鉱脈のようにその奥深くに多様な宝石を秘めている。”

80年代から現在に至るまで、フランスのアヴァンギャルドミュージックシーンの先陣を常に駆けつづけるラムンショー・ マッタのアルバムが、いよいよ、というか、ようやく日本で発売されることになった。フリージャズトランペッターのドン・ チェリーやビート詩人のブライオン・ ガイシン等のコラボレーション、ジョン・ ケージやローリー・ アンダーソンらとの親交を経て作り上げられた今作『Matta』は、ここ数年の彼の代表作である。

今作のコラボレーターは、京都を拠点に活躍するデュオ・ mama!milkとフランスで活動続けるパーカッショニストの小宮広子で、ラムンショーはアコースティックギターとヴォーカルを披露している。聴かれる演奏はほぼ一発録りのインプロビゼーション。しかし、往年のフリージャズのように激しくエモーショナルなわけではなく、むしろキュートで優しい。あるいは、彼のギタータッチのごつごつとした不器用な質感は、まるでトム・ ウェイツのバックバンドのギターのものである。

中でも名演は、5曲めの「Inner Clouds」。ラムンショーの素晴らしく味わいのあるヴォーカルが存分に楽しめる。

そもそもラムンショーはアヴァンギャルドのミュージシャンでありながら、同時に大変素晴らしいフレンチポップのシンガーでもあるのだ。80年代には、本国フランスでは知らない人は誰一人いないと言われるほどの大ヒットとなったポップソング「Toi Mon Toit」を作曲しているし、それ以降も順調にフレンチポップのアルバムをリリースし続けている。

それだけではない。シュールリアリズムの画家ロベルト・ マッタの息子であるラムンショーは、父と同じく画家であり、マルチメディアアーティストでもある。

そんな幅広い彼の活躍ぶりを説明するのは至難の業ではあるが、ともあれ『Matta』には彼の多才さがぎゅっと詰め込まれている。ラムンショーは、ひとつの鉱脈のように、その奥深くに多様な宝石を秘めている。その宝石は、しかし誰にも買い占めることはできない。すべての人とシェアするための宝石だからである。

日本で、その宝石をシェアできる喜びを、僕はいま感じている。

長屋和哉 (ミュージシャン) 2010/12/17